

シンポジウム「人間の安全保障と私たちの見た世界」

討論 パネリスト：

竹原成悦 国際協力機構（JICA）人間の安全保障担当
片山信彦 ワールド・ビジョン・ジャパン常務理事・事務局長
原田勝広 日本経済新聞編集委員
モデレーター：
中村恭一 文教大学国際学部教授

中村： 今日、「人間の安全保障と私たちの見た世界」という非常に重要なテーマを通して、皆さんに今の世界がどのようになっているかということを知る機会としていただきたいと思います。拝仙マイケル学長もこのシンポジウムへの出席を希望されていたのですが、どうしても所用のために来られなくなりました。その代わりにビデオ・メッセージを用意してくれましたので、本日の開会の挨拶として皆さんに聞いていただきたいと思います。

拝仙： 開会メッセージは前掲

中村： 拝仙学長の挨拶からも、民族紛争が多発し、そのため犠牲になるのも多くの一般市民で、まさに人間の安全保障の問題が今の世界を語る上で不可欠であることが分かったと思います。この夏も、文教大学の学生達の文教ボランティアズが、クロアチアとボスニアへ行って、紛争被災者たちのためのボランティア活動をしてきました。その折に同行した私たち教員にとっても初めてという経験をしました。そこでこのボスニアで体験した活動で、人間の安全保障と関係した重要な報告を、同行した生田先生（生田祐子国際学部助教授）からしていただくことにいたします。

生田： ボスニアでの民族浄化の拷問体験者と犠牲者に関する報告は前掲

中村： ありがとうございます。紛争現場の報告で、皆さんもかなり衝撃を受けたかと思います。それでは、今からパネルディスカッションに移りたいと思います。

まず今日のパネリストを紹介いたします。私の隣の方は、JICAの人間安全保障を担当されている竹原成悦さんです。竹原さんは文教ボランティアズが東ティモールで活動した際、現地で大変お世話になりました。本日はJICAが「人間の安全保障」にどのように取り組んでおられるかをご紹介していただくことになっております。

竹原さんの隣の方は、片山信彦さんです。片山さんは日本でも最大規模のNGOであるワールド・ビジョン・ジャパンの代表です。本日は、実際に世界で困って

いる様々な人々を支援する活動をする立場から、「人間の安全保障」の現場のお話などをしていただけたらと思っております。

その隣の方は、原田勝広さんです。原田さんは長く国際問題、特に国連問題を中心とした報道に特派員として携わり、最近では国連職員が世界各地でどのような仕事をしているかという記録を出版されております。また NGO 問題にも詳しい日本経済新聞のベテラン記者です。

ではパネルディスカッションに入りますが、「人間の安全保障とは」について、私から簡単に要約して、参考にしていただきたいと思います。皆さんのパンフレットの中に挟み込まれております紙を見てください。「人間の安全保障とは、人びとの生にとってかけがえのない自由を守り、それを広げていくことである。そのためには、人びとを過酷な脅威から守るとともに、自らの生のために行動することができるよう、その能力を強化しなければならない」。これは、緒方貞子 JICA 理事長とノーベル経済学賞受賞者であるアマルティア・セン教授が共同議長を務めた「人間の安全保障委員会」の報告書の「序」に示されている言葉です。人間の安全保障というテーマを初めて国連の文書として取り上げたのが、1994 年国連開発計画 (UNDP) が出した「人間開発報告」です。その背景としては、80 年代後半から 90 年代初めにかけて、人間を中心とした開発、という考え方が開発の世界において大きな位置を占めて参ります。94 年から 95 年にかけて、2 つの大きな会議がありました。1 つはカイロでの国際人口開発会議、もう 1 つは 95 年コペンハーゲンでの社会サミットで、ここで人間の安全保障という問題が主要テーマとして取り上げられました。人間の安全保障に関してさらに詳しくは、私のペーパー (前掲) を参考にさせていただくことにして、これからパネリストの皆さんにまずそれぞれの立場から、プレゼンテーションをしていただきたいと思います。

竹原： プレゼンテーション詳細前掲

中村： 竹原さん、どうもありがとうございました。では次に竹原さんがお話しして下さったように、スーダンやチャドでもずっと支援活動をしてきたワールドビジョンの片山さんより、具体的に人間の安全保障にかかわる NGO の活動を説明していただきます。

片山： はじめまして、片山です。JICA のお話では最近になって現場での活動を強化されるようになったそうですが、NGO として、私たちはずっと現場で働いております。ODA とはほとんど無関係なので、民間の方々の意志を受け継いで、現地の人びとに直接支援しています。そして、私どもといたしましては、緊急的支援や貧困を対象としたものや、HIV に関する支援をして参りました。そういう現場で活動する上で、人間の安全保障という考え方は、未だピンと来ないという面もあります。つまり私たちがずっとやってきたのとどこが違うんだ！と思うためです。具体的な話にはいる前に、話は少しずれてしまうのですが、整理したい

と思います。

片山： プレゼンテーション詳細前掲

中村： 片山さんどうもありがとうございました。それでは次に原田さんにお話をさせていただきます。

原田： 今日は。私はボスニアにもアフガニスタンにもイラクにも行きました。東ティモールへも行きました。先ほどのボスニアの報告をみて、やっぱり人間は悲しいな、という暗い気持ちになりました。私は、戦争は無くならないと思います。人間はいいところと醜いところがありますが、戦争では醜いところが引き出されます。ボスニアは宗教の対立とされていますが、本当にそうなのか疑問です。殺される前にやっつけてしまおう、という恐怖が引きだされたものと思います。JICAは人々のいい部分を引き出すいい仕事なのだとうらやましく思います。人間の安全保障というのは非常に難しい。これを理解するために、3つのキーワードをもって、ジャーナリストである私の視点から解説いたします。

原田： プレゼンテーション詳細前掲

中村： ありがとうございます。わかりやすく、UN中心にお話しをしていただきました。これからパネリストの方々との話し合いに移りたいと思います。私からの質問として、国家がその国の国民の安全や自由を守れないということがあります。その場合どこまで外国のNGO、あるいはUNやJICAなどが支援すればいいのかという点に関して、それぞれお話ししていただけたらと思います。

竹原： 私自身3年間東ティモールにいて、まさに国家としての独立前後、政府機能が非常に弱いときに活動しておりました。日本とアメリカの支援アプローチは大きく異なり、日本の場合はある程度仕方が無く、政府の力が強くなるのを待つ間、NGOなどに支援をしていくというものでした。一方アメリカは、より人びとに直接的なサポートをします。私自身の感想としては、現地の人々自身が自分たちを保護していくためのメカニズムを作ることが大切で、現地の政府、現地のNGOなどを強化していくのが、現実的であるように思われます。

片山： 国家を考える上で、いくつかの状況があるように思います。1つは軍事政権、あるいは経済的な基盤が弱い、そのような場合NGOとしてはどうしても限界を感じます。紛争中の援助というのは、非戦闘員が傷害を受ける可能性が非常に高いためです。入っていくことによって、現地のバランスを崩す可能性もあります。またNGOは武器を持っていません。そのためそのような国家の場合は、どうしてもUNなどに治安を維持していただかないといけないと思います。しかしイラクのよう

に軍隊を派遣するという事は、微妙な問題であり、日本の自衛隊が行くことによって、私たちのような NGO も同じように見なされ、中立的な立場ではなくなってしまいます。その結果その国に入れなくなりますが、しかし入りたい！というようにジレンマに悩まされます。日本の NGO もそうなのですが、ほとんどの NGO は自分たちで全てやるということはありません。地元の方々と協力します。日本人の役割は、マネージメントすることや専門的なことです。誤解を招かないように申し上げますが、日の丸を掲げて入るということは違うと思います。そうではなく、現地ですることを、私たちが調整していくのです。

原田： 介入というと、セルビアの空爆のようなイメージが出てきますが、今回の質問は援助に絡む介入と理解します。国家主権というのは当然あり、それを尊重します。そしてその国家が機能していない場合。破綻国家の場合は、外国が直接入ることは認められていません。UN の暫定的なもののみです。例でいうならカンボジアなどですが、その枠の中で、支援をするように理解しています。破綻国家ではなく、一般的な場合、国による援助である ODA などもありますが、NGO の方が迅速で、きめ細かい支援が出来るように思います。この流れから、北の先進国の NGO が一方的に支援するのではなく、地元の人たちを支援するため、地元の NGO の人たちと連携するということを念頭に入れなければ、長い目で見ればその国のためにはならず、そして自己満足で終わってしまうように思われます。

中村： ありがとうございます。三人とも現地の NGO とのパートナーシップを重要視するというものでした。次に JICA にしろ NGO にしろ、緊急支援の際にはどこまでスピーディーな支援が出来るのか。また紛争の際にはどのような対応が出来るか。NGO を支援する政府がどのような考え方を持つべきか、ということをお話ししていただきたいと思います。

片山： 難しいところですが、イラクの場合、私たちも入って行きました。一概に NGO といっても様々な規模の場合があります。イラクに関してですが、イラクにおいてあのようなこと（戦争状態）が起こるといことが事前に情報が流れてきており、事前にこのようなときはどのようにするか、というようなシナリオをいくつか考えておきます。とくに軍事的な場合は。もともとイラクの中には困っていた人たちがいましたので、フセイン時代に一度入ったのですが、安全が確保できないために出ました。そして先ほど述べたようなジレンマが発生いたします。

原田： 中村先生が非常にいい質問をなさってくれたので、竹原さん、片山さんのお二人に意地悪い質問をさせていただきます。外から見ていて疑問に思っていることなのですが、たとえば外務省のお金を使うときに、規制が非常に厳しいかと思えます。45 日間ルールというのがありまして、アフガンの時に（政府の）お金は出たのですが、紛争が起きて NGO はアフガンには入れず、アフガンの方々もパキスタ

ン側に出られませんでした。NGOの方々はパキスタン側で待っていたのですが、やることがない。そのうちに45日が経ってしまった。外務省は「そのような場合は仕方がない」と言っていたのですが、つまり45日（内に計画実施）には全く意味がなかったわけですね。お役所はそのようなことにうるさい。

危険度の問題でも、危ないところには行ってはいけません、というのもあります。基準はUN職員がいるかどうかなのですが、非常にうるさいですね。竹原さんは外務省ではないのですが、JICAも非常に厳しいですね、そのような観点でお話しいただけたらと思います。

片山さんには、NGOの協力ということに関して質問したいのですが、一般的に日本のNGOは規模が小さいですよ、アメリカの10分の1くらいなのですが、合併ではないですが、日本もNGO同士と一緒に協力してやることは出来ないのですか。その方が力も発揮出来るのに。しかし基本的にNGOはそういうことを嫌がり、独立自尊をつらぬきますね。そのことに関して、コメントをいただけますか。

竹原： スピードを持って入ることに関しての障害はあります。1つは安全の問題、2つめは法律の問題、3つめは得手不得手です。

安全についてですが、JICAはUNなどに比べて、厳しい基準を持っています。これは援助関係者に関する責任が厳格ということもあります。それからUNと比べて、安全などにかけられるお金・ひとの問題があります。日本の場合は、(セキュリティーの) 専門家が(現地で一緒に) いるわけではないので、(現地で活動する) オフィサーがセキュリティーのことも考えなくてはならず、基本的に情報もUNなどからもらうために、安全に関してどうしても後手後手になってしまいます。そのような現実的なことを考えて、(危険地域での活動には) 厳しくなっているのが現状です。しかし現在の状況に反省もあり、改善されつつあります。

法律に関しては、人為的な災害の復興支援は国会の答弁によりPKO法が優先的に適用され、JICAは入れないのです。

最後に得手不得手についてですが、緊急支援の際は多くの援助機関が集まりすぎて現地の人たちが調整できずに、かえって迷惑になることもあります。全体を考えると、私たちが入るよりも国際機関が入った方がいい場合には任せることもあります。以上3つが、私たちの縛りになっているといえます。

片山： 日本にNGOは500~600あるといわれています。活動分野は違うし、何よりもミッションやビジョンが違うのです。個々のNGOが掲げているゴールも違います。自発的に何かをやりたい！と考えている人たちが集まっています。NGOの給料は良くないですし……。個人として集まった人たちはビジョンやミッションに関しての意識が非常に強いのです。確かに外から見たら、もうちょっと仲良くしたらとか、企業のようにスケールアップしたほうがいいという意見もごもつともですが、そのような事も少しずつは出来ているように思います。合併した、しかし分裂したというような意見はよくきくのですね。しかしプロジェクトベースでー

緒にやりましょうというのがあります。そのためいずれ合併などというのはあるのかもしれませんが、難しいように思われます。

中村： ありがとうございます。原田さんも関係しておられるジャパン・プラットフォームのように連携しながら、かつ分担し合うというような協力体制も生まれているのは、大きな前進だと思います。ところで、安全の問題で、たとえばコソボは非常に安全な状態であるにもかかわらず、外務省は、コソボは危険な所としています。これは3年前にあったイラクにおいて3人の日本の活動家が人質になって外務省がたたかれたことも関係しているように思われるのですが、原田さんいかがでしょうか。

原田： あれは非常に難しく、素人（の行動）をめぐって（政府も）かなりたたかれて、ノイローゼのようになってしまいました。この問題は新聞社内でも議論が分かれました。私の考えとしては、あのようなボランティア精神は大事だと思います。ただ彼らのように全く治安に関して考えていなかったのは、落ち度があります。しかし、そのような（ボランティアの）気持ちがないと、現地の人たちを誰が助けるんだ？ということになるので、そのような気持ちを持ちながら安全対策を維持するのがいいというのが結論です。あのときはですね、アマチュアだから入れたという側面があります。大きなNGOは止められて、小さなNGOが援助していました。片山さんのところはどうでした？

片山： NGOの中でも意見が分かれ、精神としてはよく分かります。しかし逆に、状況をしっかり把握し、正確な情報から撤退するというのも必要な勇気だと思います。彼らは陸路で入ったのですが、そのようなNGOは全くいませんでした、その点から彼らにはセキュリティー情報がなかったということが分かります。しかしあんなに（政府が活動家たちを）バッシングをする必要は無かったと思います。

中村： いろいろと現場体験を持ち、また直接問題に向き合われた皆様ならではのお話を伺うことができました。ありがとうございました。